

保育と社会福祉を漫画で学ぶ

⑤『花もて語れ』

迫 共
(浜松学院大学)

「朗読の漫画がある」と聞いたとき、たいへん驚かされました。朗読は音声による言語表現。それを漫画という絵と文字の世界でどう表現するのだろうか。でも音楽を題材にした漫画もあるのだから、と手にとったのが片山ユキヲ『花もて語れ』でした。

主人公、佐倉ハナは内気で声が小さく、人間関係が苦手。大学卒業を機に上京して就職しますが、入社早々に周りとの関係につまづきます。そんなハナが出会ったのが朗読教室。小学生時代、唯一ほめられたのが劇のナレーターだったハナは、これならと始めた朗読を通して成長していきます。

この作品にはハナだけでなく、一般に「コミュ障」と言われそうな女性キャラが登場します。ハナの取引先の社長令嬢、佐左木満里子はハナとの出会いによって5年にわたる引きこもり生活を脱します。最終盤に登場する五十土（いかづち）園子は、数人しか声を聞いたことがないような極度の人見知りなのに圧倒的な朗読の天才です。五十土は朗読の舞台を離れていましたが、ハナへの興味から再び舞台に立ち、過去へのわだかまりを解決します。ハナ自身も朗読を通して、聞き手の心を勇気づけられる自信を身につけていきます。「悩みの答えは、頭で作るものじゃなく、人に出会って触れた心の中にある」「私が一人の表現者として朗読に今一番に込められる思い、それは私が私の人生そのものから感じたそのことだ」。第13集にある台詞はハナの成長を感じさせてくれます。

主人公が様々な経験を通して成長する物語は、漫画の王道ともいえる形式です。『花もて語れ』では主人公ハナの成長が「朗読を通して」であるところに大きなポイントがあります。文学作品を読むことは作品をイメージの世界で追体験することです。この追体験は、読者自身の今おかれている状況についての深い理解や、過去の経験の意味の捉えなおしに繋がっていきます。『花もて語れ』では文学作品それぞれのもつイメージの世界に加えて、それを朗読し味わいながら、登場人物が作中での経験の捉えなおしが描かれています。漫画を読む私たち読者は、二重の読書体験をすることになります。

第1集から第2集にかけて、ハナはひきこもっていた満里子の部屋で宮沢賢治の「やまなし」を朗読します。この場面では、賢治の世界に触れることで満里子が経験の捉えなおしをします。

大学4年生だった満里子は、周りが就職先を決めていくなかで自分のやりたいことが分からず、就職活動に疲れ、焦っていました。そんなとき、思い出されてしまうのは中学生の頃から小説家を目指して出版社の賞に応募していた妹が亡くなったことです。満里子は、明確な夢に向って努力していた妹が死に、やりたいことが分からない自分が生きていることが気がかりで耐えられなくなり、引きこもったのでした。

妹はなぜ死んだのか、自分はなぜ外に出る気になれないのか分からず、父親の前で泣き崩れていた満里子。ハナは彼女のために「やまなし」を朗読します。

川底に住む沢蟹のきょうだい。川には巨大な弾丸のようなかわせみが現れ、きょうだいの目の前で魚をさらっていきます。でも、やまなしの実もぼかぼかと流れてきます。蟹の父親は「ついて行って見よう、ああい匂いだな」ときょうだいを誘います。朗読を聞いた満里子は父と妹とともにすごした記憶を思い出します。この世には死や絶望も降りかかるが、生きる喜びや幸運も降ってきます。それを子どもに伝えようとする父親の願いを満里子は感じ取ります。

満里子は朗読から妹の記憶を引き出されます。「私は妹をおいて行けない」と涙ぐむ満里子に、妹は「行けばいいんだよ」「お父さんにそう習ったでしょ？」と微笑みかけます。満里子は記憶の中に閉じ込めていた妹のイメージと和解をはたし、感謝とともに別れます。「バイバイ、お姉ちゃん」と妹の声を聞いた気がしました。

満里子は大きな感情の開放とともに座り込んでしまいましたが、この経験がもとになって引きこもりを脱し、アルバイトをはじめて自身も朗読教室に参加することになります。

第7集では朗読イベントの舞台上で、満里子が宮沢賢治の「おきなぐさ」を朗読します。

おきなぐさのきょうだいが銀毛の房に姿を変えて、春の風に吹かれて今にも飛びたちそうな場面。ひばりが「どうです。飛んでいくのはいやですか」とにこやかに問いかけ、おきなぐさは「なんともありません。僕たちの仕事はもう済んだんです」と答えます。奇麗なすきとおった風が吹き、「さよならひばりさん」「お日さん、ありがとうございました」と叫んだきょうだいは、星が砕けて散るようにばらばらになって北へ飛び散ります。ひばりはまっすぐに空へ飛び上がり、銀毛に追いつけなくなったときに短い別れの歌を贈りました。

満里子の朗読のイメージでは、おきなぐさのきょうだいは自分と妹です。満里子は妹のイ

メージとの別れを、「やまなし」では朗読の聞き手として味わいました。「おきなぐさ」では語り手として再び味わっています。

私たちは身近な人との別れの傷を、満里子のように繰り返し味わいつくして消化するのかもしれない。文学作品の朗読による追体験は、ドラマワークやイメージワークのように語り手や聞き手に作用する一面がありそうです。聞き手よりも語り手としての方が、より大きなカタルシスがあるように感じられます。

文章を読むことは受動的な行為のように考えられがちですが、朗読の場合は語り手にとってはもちろん、聞き手にとっても能動的な行為なのだと認識を新たにしました。